愛国心の教育を考える

広島大学大学院教授　町田宗鳳（まちだ そうほう）

愛国心とは何か

愛国心とは、何だろうか。それをよく言われるように、天皇制を中心とする日本という国家を愛する心という理解に限定するのなら、いつもこの種の議論がそうであるように、かなり政治的な話になる。

しかも、そのような感情を子どもたちの心に人為的に注入するというのなら、一層、政治的な意図が濃厚となって、愛国心教育をめぐって賛否両論が沸騰することになるのは、今さら指摘するまでもない。

愛国心教育について、それぞれの政治的な信条から展開される議論は、どこまでも不毛であり、かえって教育現場に混乱をもたらすばかりである。そのへんに、愛国心をとかく槍玉に挙げたがる有識者の無責任な態度が伺える。

ところで、愛国心を訓読すれば、ふつう「国を愛する心」と読むのだろうが、漢語というのは融通無礙なところがあって、それを「国を愛したくなる心」と読めないこともない。少なくとも私は、愛国心という言葉をあえてそのように理解するようにしている。

そういう観点から愛国心教育を論じるとするのなら、今の日本は子どもたちが、おのずから愛したくなる国だろうかと、考え込んでしまう。きっと、そうではあるまい。

大人が子どもたちに向かって、「国を愛せよ」と懸命に叫んだところで、毎日毎日、汚職だの、暴行殺人だの、自殺だのと、暗いニュースばかり聞かされているのに、日本のことが好きになれるだろうか。もし私が子どもだったら、こんな国からとっとと出て行きたくなるかもしれない。

愛国心を教え込もうとする前に

結論からいえば、私は学校で愛国心というものを仰々しく教える必要はないと考えている。そんなものをもっともらしく語ろうとすればするほど、感受性の鋭い子どもは反発するだろう。

たとえ話をするなら、ゴミが溢れかえったゴミ箱を指差して、これを愛しなさいと言われても、誰がその不潔な箱を愛することができるだろうか。

反対に、丘陵を埋め尽くすように咲き誇る可憐な花があるとすれば、他人に何を指図されることがなくても、誰でもその光景に見とれるにちがいない。「桃李物言わざれど、道自ずから成る」というわけだ。

ここで読者に質問を投げかけてみたいが、はたして日本の現状は、悪臭を放つゴミ箱と一面のお花畑という喩えの、どちらに近いだろうか。

もし、日本の現状が花畑よりもゴミ箱に近いとしたら、われわれがなすべきは、「国を愛せよ」という押し付け教育をするのではなく、みずからが足元に落ちているゴミを一つでも多く拾ってみせることである。言うまでもなく、ここでいう「ゴミ拾い」とは、人間社会から一つでも多くの悪意を取り除くための善意に満ちた行動のことである。

蛇足だが、私にはご近所の人たちが起きてくる前の早朝に、散歩がてらゴミを拾って回るという妙な習慣がある。幸か不幸か、毎朝拾って歩いても、手ぶらで帰ってくるということはない。

たいていは半時間も歩けば、ポイ捨てされた空き缶やペットボトルで袋がいっぱいになる。ときどき臆面もなく、路上に冷蔵庫やテレビなどの粗大ゴミが放置されている。そのうちに市のトラックが回収していくが、時を経ずして、また同じような粗大ゴミが捨ててある。

国道を運転していると、トラックの休憩スポットを通り過ぎることがあるが、決まってゴミだらけである。それも目も当てられないほどの捨てようである。仮眠をとったトラックの運転手が窓から手当たり次第にゴミを捨

てるのである。

こういう民度の低い国で愛国心教育を語るというのは、子どもたちがいちばん嫌う大人社会の偽善である。人間として守るべき基本的マナーを身に付けることは、国家を愛する以前の問題である。

路上にゴミを捨てるというのは、比較的わかりやすい反社会的行為であるが、われわれは目に見えないゴミを社会に撒き散らしていないだろうか。

他人への中傷誹謗から始まり、妬み嫉み、怒りなど、いわば心のゴミとでも呼ぶべき否定的感情を、家庭の内でも外でも投げ捨て放題にしておいて、子どもに「国を愛せよ」というのは、不合理である。

厳密にいえば、愛国心教育は家庭に始まり、家庭に終わるべきだ。学校でわざわざ教える概念ではない。親が日本のことを愛し、日本という国を少しでも良くしようと、一市民として努力しているのなら、子どもはその後姿から日本人であることの誇りや尊さを学んでいくはずである。

昨今のＰＴＡ集会では、ずいぶん身勝手な主張をする親が増えていると聞く。まったく理不尽な要求を、無反省に学校側に押し付けて平然としている親が多数存在するという事実は、日本の学校教育ではなく、それ以前の家庭教育が崩壊しているのではないかという危惧の念を抱かせる。

そんな状況を無視して、政策的に愛国心教育を推進することは危険でもある。なぜなら、愛すべき国という実体が存在しないのに、ただ「国を愛せよ」と教えてしまうと、虚構の国家像ができてしまうからだ。

ひとたび虚構の国家像がつくられてしまうと、どんなに恐ろしいことになるかは、六十年ほど前に、国民挙げて嫌というほど思い知らされているはずだが、最近はその記憶すら薄れつつあるらしい。

したがって、愛国心を外から押し付けるのではなく、子どもたちが自然に日本のことが好きになるような国に変えていくことが先決であるというのが、私の主張である。しかも、その出発点は家庭であらなくてはならない。

スケールの大きい国家論を

それでもどうしても公教育の場において、愛国心教育を推進したいという意見があるなら、それでもよい。ただし、その教育は歴史と文化を語ることから始めてほし

い。

ここから比較文明学者としての発言だが、二十一世紀の日本は文明史の流れにおいて、とても重要な位置に置かれている。それは拙著『人類は「宗教」に勝てるか――一神教文明の終焉』(NHKブックス)(1)において論じていることだが、一神教的コスモロジーを基軸とした近代文明は、閉塞状況に陥りつつある。

そのことは絶望的な貧富の差や環境破壊という形で如実に現れているが、まもなく文明は大きな転換期を迎えることになるだろう。私は、その転換を文明のアメリカ的段階からアジア的段階への移行になると予測しているのだが、そのときアジアで真っ先に近代国家となった日本という国が果たさなくてはならない大きな使命がある。

それが何かといえば、近代文明に支配的な一神教的コスモロジーに取って替わる多神教的コスモロジーを近代的な形で導入することである。

多神教的コスモロジーとは、多元的な価値システムのことであり、特定の政治的イデオロギーや経済体制を絶対視することなく、地域社会に適応した人間の営為を受容する世界観のことである。

地球上に、多様な民族と文化が共存していくためには、どうしても多元的価値観が欠かせない。そのような新たな文明のパラダイムを人類社会に定着させるためには、縄文時代以来の多神教的コスモロジーを文化の基盤にもちつつ、近代化にも成功している日本が、もっと積極的に国際社会への働きかけをしていかなくてはならないのだ。

日本民族が優秀であるとか、日本文化は世界に冠たるものであるとかいうふうに、狭い枠組みの中で愛国心を語り始めると、「いつか来た道」を後戻りするだけだ。だからこそ、文明史の大きなうねりの中で日本という国を俯瞰するぐらいの、大きなスケールで愛国心を語らなくてはならない。

日本だけが特別な国でもなんでもない。人間に個性があるように、国にも個性がある。個性と個性の間にあるのは、優劣ではなく、違いだけである。われわれは、人類社会における日本という国の個性を自覚すればいいだけだ。

日本文化を語る技量

学校の先生方は、教室で愛国心など口にする必要はな

いが、ぜひとも日本文化については、雄弁に語っていただきたい。それには、指導要領などの次元をはるかに超えた深い素養が必要である。

だいたい国の起源を説く創造神話の中に、男と女の神様がいて、お互いの身体に余計な部位と不足な部位があるので、それを重ね合わせて国を作ったなどという荒唐無稽な物語を大切に継承してきた国は、日本ぐらいなものである。

そういうことをおもしろおかしく、しかもしっかりとした思想をもって語ることのできる先生が一人でも多く登場してくることが、この国の未来を決めるのである。

時系列的に、五三八年に仏教が伝来しただの、七九四年に平安京に遷都しただの、平板な史実を教えて、子どもたちの心に愛国心のカケラでも植えつけることができるとでも思っていれば、それは勘違いも甚だしい。

日本文化の何が面白いのか、あたかも漫画のページでもめくるように、あるいは推理小説で真犯人を捜し求めるように、教師自身が授業の展開を楽しんでいなくてはならない。

歴史でも文学でも、その気にさえなれば、パソコン・ゲーム以上に面白いネタがごろごろしている。それを見つけてくる努力をせずして、観念としての愛国心を教え込もうとするのは、教室で公害を垂れ流すようなものである。

日本文化とは何ぞや、などと抽象的議論をするよりも、臨場感のある歴史的ドラマを教師が熱をもって語るなら、子どもたちはこの国の文化の奥行きの深さに、心打たれるだろう。

ほんの一例を挙げるなら、日本文化の代表的なものに、世阿弥が大成した能楽がありますとか、千利休が樹立した茶道があります、とか言ったところで、なんの感動もない。

それよりも、佐渡島に流された世阿弥の身の上を語り、彼が作った謡曲『隅田川』を読みながら、子どもを奪い去られた母親の涙を感じさせたり、足軽から将軍になった秀吉との精神的葛藤を経ながら、大徳寺の一角にある茶室で自害せざるを得なかった千利休の心境をドラマチックに語ったほうが、よほど子どもたちの心に染み入るだろう。

私は愛国心教育というのは、そのように子どもたちの心に潤いをもたらし、感受性を豊かにするものであってほしいと願っている。

「君が代」なんか歌いたくない

それに愛国心教育といえば、すぐに国旗掲揚と国歌斉唱に結びつける教育委員会的発想も、心貧しいものである。そんなことが、愛国心の発揚に貢献すると思うなら、子どもたちをパチンコ屋に連れていったほうが手っ取り早いかもしれない。何しろ、あそこでは一日中、勇ましい軍艦マーチが流れているのだから。

だいたい、私は「君が代」が好きになれない。天皇が国民の象徴となって久しいのに、二十一世紀の今日もなぜ「君が代は　千代に八千代に　さざれ石の　いわおとなりて　こけのむすまで」と歌い続けなければいけないのか。私は皇室にそれなりの敬意を抱く者の一人だが、「君が代」を聞くたびに、にわかに臣民となって二重橋の前で額づいているような惨めな気持ちになってしまう。

あのリズムも、まったく乗れない。遠からず還暦を迎えようとしている私がそうなら、子どもたちにとっては退屈きわまりないものだろう。みんなで声を合わせて歌うたびに、なんだか元気になって、日本っていい国だなあ、と思えるような国歌を一日も早く作るべきだ。

このあいだ、岡山の長島にあるハンセン病療養所を学生たちとともに訪問したが、きわめて高齢で、多少の認知症傾向もある入所者たちと、どう交流すれば良いのか、と考え込んでしまった。そこで学生たちと相談して、敢然とやってのけたのが、あのマツケン・サンバであった。

激しく身体を動かし、大きな声で歌ううちに、涙を流してくださった入所者もおられた。その無言の涙に感動したのは、私たちであった。まさか、マツケン・サンバを日本国歌にしようとは言わないにしても、若者でも思わず身体を動かしたくなるような曲であってこそ、国民の歌といえるのではなかろうか。

才能のある作曲家はあまたいるのだから、全国公募すれば、すぐにでも素晴らしい国歌が誕生するはずだ。そういう足元からの努力もせずして、イデオロギーとしての愛国心教育を推進しようとするのは、順番が間違っているような気がしてならない。

〔文献〕

(1)　町田宗鳳『人類は「宗教」に勝てるか――一神教文明の終焉』日本放送出版協会、二〇〇七